

いつまでも勉強ができる，それが医師の道

平井内科クリニック副院長 平井 隆

家族をがんで亡くし呼吸器外科の道へ

父親が小児科医として開業しており，医療を身近に感じて育ったことが医師の道を選んだことに大きく影響しています。また，兄が16歳の若さで悪性腫瘍のため亡くなり，大学3年生のときには母親が胃がんで，5年生のときに父親が肺がんで亡くなったのです。家族を立て続けに悪性腫瘍で亡くしたことも，これまでの様々な選択に影響を及ぼしていると思います。特に，父の肺がんの手術の際には，主治医の先生にお願いして手術室に入って手洗いさせてもらいました。それが人生で初めての手術見学でした。この時の思いを言葉にすることは難しいですが，執刀された京都大学の寺松教授に父の肺を触らせてもらい，強烈な印象を受けました。また執刀された先生方の手際のよさに感動しました。

医学生ころから vital organ を扱いたいとの思いがありましたが，卒業の頃は，「内科か外科か……」最後まで迷っていました。最終的には，がんの診断も手術もできる外科を選びました。

岐阜大学医学部を卒業後は，同大学の第一外科に入局しました。岐阜大学の第一外科は，心臓血管外科，呼吸器外科，消化器一般外科が集まったいわゆるナンバー外科で，その医局に6年間在籍し，関連病院をまわる中で様々な領域の外科診療に携わることができました。ただ，専門領域を選択するにあたっては，やはり肺がんの診療を行いたいという思いが強くありました。京都大学胸部疾患

研究所(現 呼吸器外科)に入局して大学院へと進学しました。

視野を広げてくれた海外留学

大学院在学中にカナダのトロント大学に2年間にわたって留学し，イヌ肺移植におけるタクロリムス(当時はFK506という治験薬)の大量投与による寛解導入の研究を行いました。初めに大量の免疫抑制剤を投与することによって，その後の免疫抑制が不要になるように誘導するという研究です。留学をしてよかったこととして，Pearson 先生や Patterson 先生など高名な先生もおられる充実した研究室で，世界のレベルを体感できたことが挙げられます。様々な国からフェローが来ていたことから，海外の友人ができ視野が広がりました。海外へ出たことで，より日本のことが理解できるようになったともいえます。また，日本では診療の傍ら研究を行うことになりましたが，留学中は研究にどっぷりと専念することができましたので，時間的な余裕が生まれ，家族と濃密に過ごすことができたこともよい思い出です。妻と2人の子供を伴っての留学でしたので，現地で知り合った友人たちと家族ぐるみで交流することができました。そのうちの何組かとは今でもお付き合いが続いています。